池干し（水抜きと天日干し）や石灰散布などの池の準備、適切な種類と量のエサを与えるといった技術を学ぶことで、安定した養殖が可能に。自宅で食べる以外の魚は、売ることで収入源にもなる。

養殖する魚は、コイ科のローフーやシルバーバルブが人気だ。

食を食べよう 日本式

魚食文化を「養殖」で支える

私たちの食卓に魚は欠かせない。日本は世界の国々の中でも魚の有数の消費国であるとともに、限りある資源を守る観点から養殖事業を発展させてきた。その知見は東南アジア諸国の支援にも生かされている。

魚食×養殖

Myanmar ミャンマー

栄養不足の解消 新たな収入源にも

ミャンマーの中央乾燥地の農家は、不安定な気候による凶作などのため、同国の中でも貧困率が高い。新たな生活の糧として淡水魚の養殖が進められている。

文●光石達哉

案件名 中央乾燥地における小規模養殖普及による住民の生計向上プロジェクト
2014年3月～2019年3月

魚は動物性たんぱく質に加え、ミネラル、ビタミンも豊富。住民の健康な体づくりを助ける。

水田や畑に引く農業用水のため池を養殖に使うので、設備投資も最小限ですむ。使う道具は、現地で簡単に手に入る網や竹竿など。

JICA国際協力専門員
千頭 聡（ちかみ・さとし）さん（中央）

長年、東南アジア各国で養殖の普及プロジェクトを担当。「日本のやり方にこだわることなく、過去の途上国での経験をもとに、現地の状況に即した簡単な養殖技術で普及させることを目指しました」。

淡水魚の養殖で魚が食卓に上る

JICAの養殖事業での支援は1990年代から始まり、カンボジア、ラオス、ミャンマーといった国々の各地域で成果を上げてきた。今年の3月まで行われていたミャンマーの中央乾燥地におけるプロジェクトもそのひとつ。地域には古くから魚食文化があるものの、天然の淡水魚は自然環境の変化により減っていた。加えて貧しい農家が多いことから、農業以外で収入を得る手立てとして養殖にかける期待は高かった。

そこでJICAは、淡水魚の養殖に興味を抱く人を農村から募り、コアファーマー（中核農家）として育成し、コアファーマーが種苗生産した稚魚を他の農家に卸すとともに養殖を指導して技術を広めるシステムを作っていった。養殖に使う池は、それぞれの農家が持つ農業用のため池などを活用した。

「現地の農民が農民に指導をして普及させていく――この手法は、これまでの日本の途上国協力における農村開発の経験がもとになっています」とJICA国際協力専門員の千頭聡さんは話す。

また、養殖を指導できるミャンマー水産局の職員は人手が不足しており、加えて同地域は都市圏からのアクセスが不便で職員が訪れる機会も乏しかったことから、日本人専門家が現地に毎週のように足繁く通った。種苗を池に入れる前の準備や餌の種類、給餌の方法などを、ともに泥にまみれながら直接指導したことが大きな信頼を生んだ。約5年間の活動で新たに養殖を始めた人は1122人にも上る。「市場に行かなくても、池で魚を捕まえることで簡単に魚カレーや魚フライが作れる」「魚を売ることで収入が増えて、子どもの学費が払えるようになった」と生活の質の向上を喜ぶ声が多い。養殖技術は他の地域でも求められている。